

---

## 詩歌・小説の中のはきもの（第8回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

85 洗濯から届いたばかりのその足袋は、足袋というより靴に近かった。まるで白いブーツのように足なりの形にアイロンされて、ごていねいにコハゼまでかかっていたのである。たぶん、靴の木型でも中に押しこんで克明にアイロンをかけたのだろう。生まれて初めて足袋を見たフランス人の洗濯屋の困った顔が浮んで、おかしいやら気の毒やらで、私たちはしばらく笑いが止まらなかった。

高峰秀子

★『コットンが好き』から。花柳章太郎夫妻と高峰夫妻がパリに遊んだときのことだった。「いちばん汚れるところにいちばん汚れのはげしい白をもってきたことは、小面憎いほどの洒落ものであったと思う」と高峰は言う。私は足袋は曲者だと思う。証拠の川柳を3句挙げておく。

白足袋の白の汚れぬさみしさよ

時実新子

足袋白く履き内幕のぞかせぬ 野口初枝

白足袋を脱いで疲れがどっと出る

奥田白虎

86 この靴のはきふるされた内部の暗い穴から労働の歩みの厳しさがじっとのぞいている。この靴の頑丈な重さのうちには、荒涼と風の吹きすさぶ畑のなかにごこまでも遠く延びる単調なあぜ道を歩む、ゆっくりとした足どりの粘りづよさ

がたくわえられている。革には土の湿り気と飽和が浸みこんでいる。この靴のうちには、大地の無言の呼び声と、熟れた穀物を贈ってくれる時の大地の静寂と、人気のない休耕時の寒ざむとした畑にみなぎる大地のゆえ知らぬ拒絶とが響いている。嘆きをもらすわけではないが、パンを手に入れることができるだろうかという不安、またもや苦難を切りぬけることができたという言葉にならぬ喜び、出産が近づいた時の心配、死に脅える戦慄が、この靴を通りぬけてゆく。

マルティン・ハイデガー

★『芸術作品の起源（茅野良男訳）』から。2005年5月、東京国立近代美術館で遠来のゴッホの〈古靴〉を観た。私はどこかで読んだこの古靴はゴッホの自画像だという解説が頭にあって、それ以上の感想をもたなかった。ハイデガーのこの鑑賞には感服した。靴づくりに携わる人はこの作品（複製でもよい）を見て自分が何を思うか試してみるといい。自分の作っている靴がどんな人に、どんな風に履かれるのかイメージするぐらいのことでは、まだ入口でうろろしている程度だとすぐ気付く。

87 シューズを履いたランナーも、もちろん足裏で会話をしつつけながら走っているのだが、その場合、シューズが通訳の役目を果たす。しかし、ビキラ・アベベ

は通訳ぬきで石畳と話しつづけたのであるから、金メダル以上の豊かさを得た筈だと感じたのである。 阿久 悠

★『昭和のおもちゃ箱』から。オリンピックのマラソンを裸足で走るエチオピアのランナーがいたというのは、今や昔話になってしまった。1年の大半を裸足で小学校に通学した私の経験からすれば、たとえカチカチに硬くなったとしても足裏は、敏感な感覚器官で、木陰の道のひんやりした心地よさ、パサパサに乾いた道の埃のような土の温かさなどを感じとっていた。草の実の粒々や、ぬかるみのねっとりとした土が指の間をぬける感触が、半世紀過ぎた今も残っている。阿久はアベベがゴールした後、余裕綽々と柔軟体操したのを見て、自分なら「地球との足裏の会話を詩にして、朗々と読み上げる」と書いている。阿久も裸足の経験が長かったのだろう。

88 下駄などというものは、一高へ入って以来一足も買ったことがなかった。いつも、同室の誰かのを穿いて行くか、でなかったら近くの下駄箱に入っているのを穿いて行った。どうも、下駄を買った記憶などは、ちっともないのだが、履物に不自由したことはなかった。菊池 寛

★『半自叙伝』から。これは道徳や貧富の問題ではない。旧制高等学校の風俗の一面として紹介しているに過ぎない。靴のような閉塞性の履物と違って、下駄や草履は、この意味からもまことに“開放的”な履物であった。昔の人が今、料理屋や病院、日本旅館の玄関に脱がれた革靴を見たとしたら、「水臭いネエ、他人を寄せ付けねえようにしてやがる」と言うだろう。日本家屋から縁側を消した犯人を探して行くと、案外革靴あたりにたどりつくのかも知れない。

89 商品の下駄<sup>ひわ</sup>の乾割れの締まり来ぬ  
梅雨のきざしの細き雨して  
風の日<sup>たひ</sup>は鱗立つゆゑ雨のけふ  
蛇皮の草履の緒すげなをしたり  
桜庭誠四郎

★『昭和万葉集 巻13・15』から。この二首から季節によって表情を変える日本の履物の繊細さに愛しい思いを抱く人は多いだろう。だが、流通センターの所長を経験した私には、靴が湿気によりカビることや、売り逃した靴の陳腐化、色ヤケを思い出させて、下駄屋の主人が落ち着かない気持ちで店に坐っていたのだろうと容易に推測できる。商人というのはその日、その季節に売ってしまわなくてはならない商品を抱えて必死に客を待っている人なのである。

90 貧しい父親は、我子の壊れた木靴をつくってやるために、冬の夜、忍び出て小川のほとりの木立を切って帰る。木靴といってもサンダルのようなものにすぎない。

その木靴を黙々とつくりはじめる中年の父親の姿に、我子への愛がにじみ出ている。結局、この一家は、立木を切ったことが地主にわかってしまい、行先の見込みもないままに、小作農場を追い出されてしまう。 池波正太郎

★『木靴とウェディング』から。〔木靴の樹〕という題名の、一人もスターが出演していない、パリで大当たりした映画（1978年作品）を見た池波は「物質と機械の文明の中で、ようやく、人びとは失ったものに気づきはじめたのではあるまいか」と感想を述べる。もっとも貧しい履物である木靴が人々の感動を産むのである。西洋の絵画や映画、演劇に現われる木靴を民芸品のように鑑賞すると大切なものを見落としてしまう。

91 駅前の増田書店へ行った帰りにそば  
芳で八百円のそば定食を食べる。これが  
まためっぽううまいんだなあ。このとき  
も下駄ばきだ。ということは、自分の家の  
近所で食べるそばが一番うまいです  
ね。ちょっと酔っ払って、ふらふらしな  
がら家に帰る、ってのが色っぽい。

嵐山光三郎

★『不良中年は色っぽい』の「そばは下駄  
ばき」から。花火なんかも浴衣に下駄ばき  
が似合う。羽根つきなんかスニーカーを履  
いてやったりしたら、それはもうバドミン  
トン競技である。色っぽさなんか更に感じ  
られない。寿司なども本来草履か下駄だろ  
う。古いのを承知で言うと、華道展や書道  
展の会場にハイヒールなんて人を見かけ  
ると、黒のゴム長で乗り込んできた程の違和  
感がある。

92 当初、日本の当局の面々と同席する  
機会を持った西洋人は、長靴を脱がずに  
すむ許可を得るのに非常に苦労した。日  
本人は、制服で正装した将校が靴下姿で  
立っていることの滑稽さが理解できず、  
何度か悶着が起こりそうになったが、そ  
んな時には、待ち合わせた場所に到着し  
た西洋人は長靴を脱ぎ、日本人の礼儀作  
法をそんなに踏みにじることはない軽い短  
靴に履きかえることによって、  
何とかその場を切り抜けたのだった。

エドゥアルド・スエンソン

★『江戸幕末滞在記（長島要一訳）』から。  
スエンソンはデンマーク人、フランス艦隊  
の士官として来日した。BSE問題で牛肉の  
輸入再開を認めない日本人が不思議だと思  
う米国人がたくさんいる。罹病する「確率」  
の問題として考えている彼らに、「潔癖」  
な日本人の個性を認めさせるのは容易では

ない。室内では靴を脱ぐ習慣など、私たち  
は「潔癖」とも意識していないほど生活全  
般に浸透しているから、仮に外国からどん  
な圧力をかけられたところで廢れることは  
ないだろう。

93 八世紀、イスラム教徒がイベリア半  
島に進出して以来、ベルベル人が地中海  
地方に産するウルシ属のシューマックの  
タンニン（渋）を使って山羊皮をなめし  
た皮革（モロッコ革）の製造技術がコル  
ドバに伝わった。もとのコルドバ革は野  
ヒツジの皮でつくられたといわれるが、  
コルドバに名をとったとされる「コード  
バン」は馬の尻皮を植物タンニンでなめ  
した、牛皮の倍の耐久性をもつ、柔らか  
い光沢のある最高級品をいう。

★『世界史のなかの物（千葉県歴史教育者  
協議会世界史部会編）』から。私事にわた  
るが、私は日本モロッコ協会の常任理事を  
務めている。日本でモロッコと言えば、映  
画『カサブランカ』の舞台として知られる  
が、あのフィルムは1フィートもモロッコ  
で撮影されていない。モロッコは遠い国  
だったのである。それで本誌を借り、せめ  
てモロッコ革について触れたいのだが、残  
念ながら柄折久美子の『モロッコ革の本』  
という書名以外、詩歌小説の中にさっぱり  
取り上げられない。一時代を画したモロッ  
コ革の技術がスペインに渡り、コードバン  
に引き継がれている事実はもっと知られて  
よいことだと思う。

94 同じ型紙と木型を職人に渡せば、常  
に同じ靴ができると思っている人が多い。  
違う。同じ靴は決して上がってこない。  
職人の個性が出てしまう。竹之内の  
先代が以前話をしてくれた。おもしろ半  
分に同じ木型と紙型と革を渡して、各国

の職人に造ってもらった。すると見事なほど全然違う靴ができ上がった。

桂 望実

★『ボーイズ・ビー』から。私が勤務していた会社もフランスの靴会社と提携したとき、同じことをした。仕上げを除き、大体同じ靴ができた。差をつけられた仕上げも、技術的には似たような風合いを出すことはできたのだが、問題があった。時間が約2倍かかってしまうのである。量産工場ではそれは致命的なコストの差異になる。小説にメクジラを立てたくないが、先代が「おもしろ半分」でこんなことをしたとは私にはどうしても思えない。

95 元気な頃の田中角栄が下駄履き姿で庭に現れた写真を見たとき、下駄履きそのものには好感を抱いたが、靴下なぞ履いた足で下駄をつっかけているのを見て、この人はダメだ、と思った。へんな気取りが靴下から臭ってくるからで、あれで裸足で下駄を履いていたら、わたしは角栄氏に本当に共感していたかもしれない。  
中野孝次

★『人生のこみち』の「下駄とわらぞうり」から。“白足袋宰相”といわれた吉田茂の袴をつけ白足袋雪駄姿が一段も二段も上、本格的だと中野は言う。他人の足元を見ているのは旅館の番頭だけにかぎったことではないのである。だからシューフィッターが、服装とのコーディネーションまでアドバイスできたら鬼に金棒、客をとりこにできるだろう。友人たちに尋ねても、靴選びで「普段、今お召しのような服装が多いのですか」と靴屋で服の好みを確かめられたことはないという人が殆どである。

96 イギリスの有名なブランドものだっ

た。華奢なヒールは9センチもあった。歩くための靴ではない。見せるため、いや見せつけるための靴だ。

夫は、ヒールの高い靴が好きだった。カジュアルな格好でも女はヒールの高い靴を合わせるほうが格好いい、颯爽として見えるという。それはつまり、自分で歩かなくていい、ということだ。

甘糟りり子

★『靴に恋して』の「冷たい部屋」から。「自分で歩かなくていい」というのは、外に出なくていい、家にこもって夫にかしずいていてほしいの同義だろう。「深窓の令嬢」などという言葉すらあった時代を思わせる。私はフェミニズムの信奉者ではないが、女性が歩かない社会は確実に女性の地位が退歩した社会である。どんなに愛する男性が希望しても、自分の足で歩くのを止めてはいけない。女性よ歩け！

97 あらゆる男性の心の奥に住む、すばらしい“オス魂”のかたまり。裸足の男は、自分の皮膚だけをまもって、さわやかにくつろいでいる。自分自身と完全に折り合っている。でも、吐き気を催すようなことを、たまにしでかすのが玉にきず。彼はいわゆる原始人。

キャスリーン・アイズマン

★『靴で男を見分ける方法(松井みどり訳)』から。英語には裸足と素足の違いがない。どちらもベアフット。履物をはかずに地面を歩くのが裸足で、畳の上や下駄、サンダルなどを足袋や靴下をはかずに素足である。日本人は素足の人を見て、爽やかにくつろいでいると感じることはあっても、原始人などと極論する人はいない。私など逆に、自宅で靴下をはいている人はいつもくつろげないでいる気の毒にも哀れな

都会人に見えてしまう。

98 カランコロンと木のサンダルを引き摺って歩く音を聞くと、夏のひとときが浮かび上がってくる。乾いた土を木の底が引っ搔いて砂埃が立つ。麦藁帽子をかぶり、タオルガウンを肩にかけたぼくは、母や風間の姉妹たち、つまり、大人たちの真似をして、いかにも今から海水浴に行くんだぞと告げるかのように、素足にわざとサンダルを大袈裟に響かせて行く。あたりの熱気は、水の冷えを渴望させ、風に乗った海の匂いが鼻孔を開く、あの夏の歩行が、サンダルの音とともによみがえってくる。 加賀乙彦

★『小暗い森』から。洋の東西を問わず、履物と音は密接な関係を持ち続けてきたのに、ゴム底、合成底が出現してから靴の大半は音を失ってしまった。一時期床材の開発が遅れて、革底（特に金具を埋め込んだもの）はすべり易かったことも無音化に拍車をかけた。どんなに色が美しくても、どんなに形が流麗であっても、匂いのない造花のような靴。韻律のない書き散らされたような散文的な靴。どうか小さな楚々たる音、優しく高貴な心をあらわす響きを靴に与えてやってください。

99 こんどの旅行では、なんとか究極の一足にめぐりあいたいものだ、と、ひそかに考えていた。室内ばきなどと簡単にいうが、考えてみると老後の伴侶ともなるべき大事な品物である。フット・ギアなどと呼ぶより、〈足の友〉と考えるべきだろう。はきものを軽視する人には、決して健康はおとずれないのである。 五木寛之

★『みみずくの宙返り』から。薄くて、軽

くて、足にやさしい室内ばきを何十年も探しつづけているのだという。国内にはないのでザルツブルク音楽祭に赴く機会に“めぐりあい”を賭けているのである。私は英国の王室御用達の室内ばきをお世話になった先輩に贈ったことがある。その先輩が長逝したとき、弔問し納棺に臨んだら、くたびれたその室内ばきが棺の中に収められているのを見た。もう誰も私がプレゼントしたということを覚えている人はいないようだった。

100 なかなかいい披露宴だった。お開きの前に庭園で写真を撮るといので、玄関から履物を運んでもらった。次々と庭へ出るが、私の靴が見つからない。玄関にも残ってない。最後に一足の靴が残った。履いてみると一歩踏み出すたびに脱げそうになるほど大きい。

私の靴を履いている人を見つけて交換したのだが、あれほどサイズの違う靴を履いていたのに、まったく気づいていなかった。最初から、靴は窮屈なものだと諦めていて、違う靴を履いていると思ひしなかったのだろうか。 石津謙介

★『「変えない」生き方』の「自分の足のよな靴」から。石津はこの後こう書き継ぐ。「靴は、足にフィットすることが命だ。ぴったり合う靴が見つかるまで、じっくり時間をかけるべきだ。また、客が選んだからといって、こんな靴を売った靴屋にも罪がある」と。この後段が大切である。この話を聞いて、無頓着な人がいるものだった靴の関係者は失格である。靴屋はもっと専門家としてのプライドを持つべきだと思う。